

富永神社祭礼奉納

と き 平成十七年十月七日(金)
午 後 五 時 始
と ころ 富永神社 能 楽 殿

能 組

仕 舞 田八田 村島村
加藤 今泉 藤尚 晃
村田 昂平

狂 言 重 喜 天 野 萌 中 くるみ
新登意 住持 田 中 くるみ
後見 酒 井 宏

地謡 佐野 泰三 大原 正巳 水谷 至男

仕 舞

枕 慈 童 松 虫 玉 葛 自然居士
平野 瑞季 島 考三郎 島 尚大郎 平野 阿裕美

狂 言 清 水 天 野 雅 夫 主 山 本 勝
太郎冠者 後見 水 谷 至 男

(休 憩 三 十 分)

7:00分頃

能 玉 葛 清水利高 竹内省吾

問 加 藤 賢 一

大鼓 河村 総一郎 小鼓 福井 啓次郎 笙 今泉 英三

後見 鈴木 木

笙

地謡

長田 共永 加藤 崇史 高林 白牛 高林 白牛 竹内 三郎 牧野 研司

6:10分頃

5:15分頃

7:45分頃

狂言

梟山伏

山伏酒井

宏

兄弟
権田重
小澤貞博
天野雅夫

8:05分頃

舞囃子

船弁慶

中嶋康夫

大鼓 小鼓
鳥居宗克

小林寿枝

苗酒井淑規

8:25分頃

狂言

樋の酒

大郎冠者 次郎冠者
佐野泰三
山口俊一

主
大原正巳
後見 加藤賢一

8:45分頃

能

猩々

シテ 杉浦史佳

ウキ 竹内三郎

後見 鈴木

肇

地謡

大鼓 小鼓
清水利高
田聡子
大鼓 小鼓
中嶋康夫
長田共永
鈴木崇史
高林白牛
牧野修
高林白牛
太田伸弘
今泉英三

(終了予定九時十五分頃)

主催本町区

あ ら す じ

狂言

重喜じゅうき

法事に招かれた住持が、さつそく出かけようとするが、あいにく頭の毛を剃る者がいない。しかたがなく新発意の重喜に頭の毛を剃らせることにして「弟子七尺去つて師の影を踏まず」と教えます。そこで重喜は、住持から遠く離れ、長い棒の先に剃刀をつけて剃りはじめ、ついに鼻を剃つてしまい……………。

狂言

清水しみず

主人から、茶の湯で使う水を野中の清水へ汲みに行くように命ぜられた太郎冠者は、行きたくないなので、清水に鬼が出たと水桶を捨てて来たが、主人が取りに行くと言うので先回りして、鬼に化けておどすが結果は……………。

能

玉葛たまかづら

諸国一見の旅僧が、奈良の社寺を巡拝の末、初瀬の長谷観音へ参詣に出かけます。初瀬川の辺りまで来ると、一人の女性が、底も浅い山川の岩間伝いに小舟に棹さしてやって来ます。不審に思つて言葉をかけると、女は自分も長谷寺へ詣でる者ですと答え、「海士小舟初瀬の川」と古歌にも詠まれていますから、舟に乗つていても不思議ではありますまいと答えます。そして、僧を二本(ふたもと)の杉へ案内し、玉葛内侍が筑紫から都へ逃げ上り、此所へ来たところ、母夕顔の侍女右近に巡り合つたことなどを語り、自分はその玉葛の亡霊であるとほめかして消え失せます。(中入)

僧があわれに思つて、読経していると、玉葛の亡霊が現れ出て、乱れた思いに狂い舞います。やがて昔の事を懺悔して妄執を晴らし成仏したと見るや、僧の夢もさめました。

狂言

梟山伏ふくろうやまぶし

ある男が、山から帰ってきてから具合の悪い弟の太郎を治してくれる様、山伏に祈禱を頼みます。山伏が一心に祈り始めると、太郎は急に「ポーン」と奇声を発します。兄の話によると、太郎は山に入り梟の巣にいたずらをしたと言う事なので、これは「梟」が、とり憑いたのだと察した山伏は、「梟」の嫌う鳥の印を結ぶ。しかし、一心不乱の祈りもむなしく太郎は鳴き続け、そればかりか今度は兄にまで、梟が憑いて鳴きだしてしまいその結果は……………。

狂言
樋の酒

主人の留守に太郎冠者は米蔵を、次郎冠者は酒蔵を預けられた。酒好きの太郎冠者は、次郎冠者に頼んで酒蔵から樋を架けて酒を飲ませてもらい、二人は別々の倉で酒盛りをしていたが、そのうちに一緒になって謡い舞いしている所に、主人が帰ってきて……。

能

猩猩々々

中国のカネキンザンの麓に、高風こうふうという大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは揚子ようすの市に出て酒を売ると、富貴の身になるというのです。その夢のお告げの通りすると、なるほど次第に金持となりました。ところで、市のたつごと高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変らないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む猩猩しんようだとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽しんようの江のほとりに出、酒壺を置き、猩猩の出てくるのを待つことにします。(ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります)やがて猩猩は、薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を樂しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音をかんで、波の音は鼓の調べのようにひびきます。この天然の音楽にのって、猩猩は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。